

本学学生および卒業生が活躍可能な

カラー関連ビジネスモデル構築のための研究

—— パーソナルカラー診断手法確立のための基礎研究 ——

小林 政 司
定 延 久美子

本研究および今後の研究では、現在行われているさまざまなカラー診断の理論および手法の調査を行い、その問題点を明らかにするとともに、可能な限り科学的に裏付けられたカラーコーディネーション理論を構築すると同時に、これを活用して感性の優れた本学学生および卒業生が活躍可能なカラー関連ビジネスモデル構築を目指す。

また、カラーコーディネーションの良否の基準を被服着用者の肌色の美しさに見出し、色彩の対比効果を応用した理論展開を予定している。こうした基礎的な部分では、色・柄の異なる各種モデルを CG シミュレーションにより作成し、その視覚的評価実験を行う。この際のモデルとしては、研究の初期段階では幾何学図形を、さらに発展時には被服形状、および口紅、頭髮、ネイルカラーなどの色彩に照準を絞ったものを目的にあわせ開発して用いる。

一方、多くのカラー診断では、さまざまな色彩に着色されたドレープと呼ばれる布が用いられ、これを順に被験者の肩にかけてアドバイスをを行う方法がとられる。こうしたカウンセリング実務に関する部分では、その手法の再構築と検証が主目的となるが、すでに、市販の染色布を用いてドレープを作成し、小数の被験者をモデルとしてその効果の検証を開始した。

本学学生および卒業生が活躍可能なカラー関連ビジネスモデルとしては、上述のようなカラー診断を中心とするものの他、被服以外の分野でのカラー提案など同様の手法を応用できる場面は数多いと考えられるので、可能な限り多角的なビジネスモデルの構築を目指したい。なお、研究発表時には本学教員、本学出身他大学教員、本学卒業生、本学職員との連名で発表者を構成するなど、現在までも行っておりこれを継承する。

以上のように本研究においては、従来、判定者の感やイメージに依存して行われていた診断を多角的かつ科学的な裏づけを持って行おうとしているところであり、今回購入した機器により測定可能となる視線移動およびその解析データは、実証的論拠の一つとなる。本年度は、実行可能な範囲内で、機器の整備とこれを応用した実験データの収集方法ならびにその解析方法の検討を行い、同時に得られた研究成果をまとめ、(社)日本繊維製品消費科学会 2008 年年次大会において「ファッションカラーコーディネーションに関する研究(第 6 報) — スポーツウェアの誘目性、視認性に関して —」と題した学会発表を行った。